速報
kyodan-sokai sokuho
No.2
2016.10.26　12:20
第40回 日本基督教団総会
2016年10月25日（火）～27日（木）
総会速報発行委員会 発行

石橋秀雄 議長再選

教団総会1日目夜に議長選挙が行われた。1回目の選挙で有効投票数の過半数を満たさなかったため、再投票がなされた。2日目逝去者記念礼拝直後、選挙結果が報告され、石橋秀雄議長が再選された。石橋議長は挨拶に立ち、「大変重い気持ちで受け止めている。2期4年で十分と言って黙っていたが、3期目選ばれ、4期目は信じられないという思いでいたので、戸惑いもある。選任されたので、教団の課題に懸命に取り組んで参りたい。福音に燃えて、伝道する教団を建設し、危機に立ち向かう。このことを訴え、責任を果たして行きたい。お祈りとお支えをいただきたい」と述べた。続いて石橋議長のために長山信夫議員が祈祷を捧げた。

【本投票の結果】
投票総数……373票
有効投票……373票
無効票数……0票
石橋　秀雄……186票
久世そらち……143票
（以下省略）

【本投票の結果　第2回目】
投票総数……373票
有効投票数……371票
無効票数……2票
石橋　秀雄……201票
久世そらち……158票
（以下省略）

佐々木美知夫 副議長再選

2日目、議長選挙結果報告承認の後、ただちに副議長選挙が行われた。結果、佐々木美知夫議員が再選された。佐々木副議長は挨拶に立ち「これから教団が財政的にも機構的にも大変重要な時期に入って来る。教団が伝道力をしっかりもち、伝道する責任の重さを感じている。これは皆さんと共に祈りながら、神に願い、なしていただくことだが、できるだけのことをさせていただきたい。私を選んでいただいたことは、皆さんと共に歩んでいくことであるので、お祈り願いたい」と述べた。続いて佐々木副議長のために真壁巌議員が祈祷を捧げた。

【本投票の結果】
投票総数……362票
有効投票数……361票
無効票数……1票
佐々木美知夫……199票
邑原　宗男……128票
（以下省略）

逝去者記念礼拝

秋山 徹牧師（上尾合同教会）による追悼説教

総会2日目、26日は逝去者記念礼拝をもって始められた。

秋山徹牧師（上尾合同教会）より、コリントの信徒への手紙一第3章5～17節によって「火の中をくぐり抜けて来た者のように」と題し説教がなされた。

「この2年間で逝去された教師を憶える。主の計画の中で教団の伝道者となった方。派遣されこの地で働いた方。主の物語がそれぞれそこにあった。

コリントの教会は『誰につくか』ということで争っていた。パウロはそれを叱責するようにして、十字架の主の命から遠くなっていないか、と指摘をする。皆それぞれ違う。しかし一つの働きである。そのことは今日の我々も同じく聞くべきである。

ここで名前を読み上げる方々は80～90代が多い。戦争、キリスト教への迫害を経験し、またキリスト教ブームの中で献身し、『荒野の40年』の中で伝道者であった方もいる。その方々は、『植え』、『水を注いだ』。我々はそれを継承する。

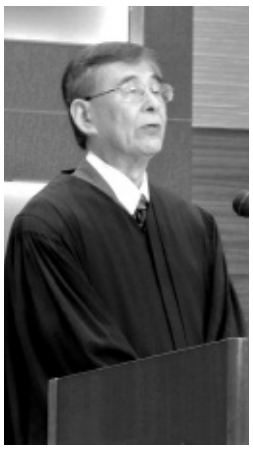
パウロは8節と12節以下において、伝道者への報酬についても語る。ここに記念する教師たちの働きは多様である。目立つ方、目立たない方がいる。その方々へ、我々自身が、それぞれに評価をしたくなる。パウロは、イエス・キリストという土台の上においてなされる働きには、『金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる』という言い方で、差異があると言う。しかしその評価は人間がすべきことではないとも言うのである。

13節で『かの日にそれは明らかにされるのです。…かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味する』と言う。それは最後の審判のことである。教師の働きの評価は、最後の審判の日の評価だ。その火によって、燃え尽きる働きと、燃え尽きない働きとがある。ただ神の火による検証がなされるのだ。

我々の働きの全ては火の精錬が必要である。しかし、その峻別の目を我々は持っていない。パウロは言う。15節『その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように、救われます』。これはキリストによる和解の十字架、贖罪の信仰に導く言葉である。我々はこのキリストによって、和解の務めに召されている。最後の審判の時にも、それは明らかにされる。我々は贖罪の恵みに支えられることが約束され、確証されている。

人間の目によって高く評価される者も、失敗をしたと思う者も、全ての者が終わりの日に火で精錬される。我々はひたすらに贖いの主を信じる。この信仰の中で、逝去された一人ひとりのことを憶えたい」。

この御言葉の中で、この2年間に逝去連絡のあった教師113名、宣教師16名の名前が読み上げられ、賛美と祈りがささげられた。



来賓挨拶

韓国基督長老教会

クォン・オリュン議長

韓国基督長老教会（PROK）は貴教団と長年パートナーとして歩み、アジアの教会が共に働くことの大切さを感じている。

日韓は緊張をはらむ歴史的課題を負っているが、先月、貴教団から長崎哲夫総幹事と高田輝樹職員がPROKを訪れた際、過去の出来事と真摯に向き合い、和解を求める姿勢を示されて感動した。貴教団は過去の出来事に対して韓国に謝罪と反省を示した初めての宗教団体であり、痛みあるところに主イエスの愛と癒やしの御手を差し伸べる、貴教団の熱い思いに感謝している。

PROKは東北アジア地域が真の平和を実現する日を夢見ており、そのために貴教団と心を合わせて国家間の癒やしと和解のために祈りたい。イ・ジェチョンPROK新総幹事とPROKの兄弟姉妹の貴教団への思いを伝え、教団総会での交わりとすべての協議に主の祝福を祈って私からの挨拶とする。

台湾基督長老教会

スドゥー・タダ議長

台湾基督長老教会（PCT）第61回総会期常置委員会、林芳仲総幹事、23の中會と4族群区会を代表して貴教団総会に祝福を祈る。

これからも貴教団とPCTが結んでいる宣教協約関係を継続し、さらに強め、パートナーとして宣教の証を実践してゆきたい。共同声明文が貴教団とPCTの共同の信仰告白となり、将来の宣教課題に向き合うことを願っている。この教団総会が聖霊の導きのもとにあり、神の御業が貴教団の諸教会を通して為され、日本の皆様への祝福が豊かであるようにと祈る。

大韓イエス教長老会

リ・ソンヒ第101回期総会長

貴教団と大韓イエス教長老会（PCK）は今年の2月と6月に日韓の5教会の宣教師派遣に関する実務協議を行い、6月末には貴教団からPCKに派遣していただいた洛雲海宣教師（長老会神学大学教授）の活動期間延長に合議するなど、日韓両国における伝道のために緊密に協力し、交流を深めている。また、先月開催されたPCKの第101回定期総会に貴教団から長崎哲夫総幹事に出席をいただき、感謝申し上げる。これからも貴教団とPCKが主の愛に結ばれ、交わりと働きを続けられるようにと祈り願う。

PCKは現在、東北アジア地域の軍事的緊張、核関連施設への威嚇、在日韓国人や在日朝鮮人を苦しめるヘイトスピーチなどの課題に祈りつつ取り組んでいる。貴教団との尊敬と信頼に基づいた相互理解を深め、東北アジアの平和のために心を合わせたい。

PCKの第101回期総会は宗教改革500年を記念し、「改めて、聖なる教会へ！」との主題を掲げて開会した。韓国と日本のすべての教会が新たに聖霊で満たされて祈り、働けるようにと祈ってほしい。

世界教会協議会

西原廉太世界協議会（WCC）中央委員・日本聖公会

貴教団総会に際し、ご挨拶の機会を賜り感謝申し上げる。日本でWCCに正式加盟しているのは貴教団・在日大韓基督教会・日本聖公会で、貴教団はWCC第1回総会から聖公会と共に代議委員を派遣し、WCCを中心とする世界エキュメニカル運動に重要な足跡を残して来られた。

1954年に第五福竜丸事件が起こり、日本では貴教団やNCCを中心に原水爆実験禁止の署名運動が行われた。事件から5ヶ月後に開かれたWCC第2回総会では、当時の貴教団総会だった小崎道雄牧師が膨大な署名を携えて出席し総会全体に大きな影響を与えた。60余年前に、日本の教会から世界エキュメニカル運動への貢献があったことをぜひ記憶にとどめておきたい。

WCCからは非核世界実現に向けた取り組みの中で、2014年8月にチャン・サンアジア地域議長、12月にトヴェイト総幹事、昨年8月にWCC代表団が日本を訪れた。トヴェイト総幹事をはじめとするWCCからの、これら一連の訪日に際して貴教団が献身的にご尽力くださったことへの感謝のメッセージをここにお伝えする。貴教団の世界エキュメニカル運動への引き続きのご貢献をお願いするとともに、貴教団のお働きがますます主に強められるようにと祈る。

挨拶された来賓者の他、総会にご出席いただいた方々

台湾基督長老教会
リム・ホンティオン総幹事
ン・テッカン教会・社会幹事

大韓イエス教長老会（統合）
キム・ビョンホ宣教師

韓国基督長老教会
キム・ミジャ氏

アメリカ合衆国長老教会
リム・チュンシック東アジア担当幹事

合同メソジスト教会
小海光宣教師

カナダ合同教会
川野真司宣教師

ドイツ福音主義教会
フェルディナント・ケニング牧師

在日大韓基督教会
キム・ソンジェ総会長

日本キリスト教協議会
小橋孝一議長

海外宣教報告

シンガポール日本語キリスト教会（JCF）

松本章宏牧師

近年、宣教師の活動が多様性を増している。派遣された国の方々への伝道を行うのみならず、日本国内に滞在する外国人への伝道や、海外に住む日本人への宣教活動が展開されている。11年前に東南アジアで暮らす日本人への福音伝道に召し出され、インドネシアおよびシンガポールで伝道を行って来た者として報告を行う。

伝道を行う中で、海外で暮らす日本人は福音に向けて心が開きやすくなっていることに気付いた。その背景としていくつかのことが考えられる。異文化に置かれると、日本にいた時には考えなかった「自分は何者か」という問いを抱くようになる。その問いが霊的アイデンティティを尋ねる求めとなり、「神に造られた者」としての自己の発見へと導かれる。また、人口の八割がイスラム教徒であるインドネシアでは、一日に五回の祈りを献げる人々を身近に見るうちに宗教への関心を持つようになり、信仰へと招かれることもある。日本では、教会に行ってみたいと思っても家族的なしがらみから行けなかった人も、海外では解放された気持になって礼拝に来るということも起こる。そのようにして、東南アジアでは数多くの日本人が日本語教会で主との出会いを果たしている。

海外で受洗して日本に帰国すると、日本の教会に根付くことができないということがしばしば起こる。ここで、いわゆるディアスポラ伝道が必要となる。海外で宣教する日本語教会と日本国内の教会が連携して、帰国した信仰者が日本の教会になじめるよう共に働くことが大切であろう。ルカによる福音書5章で「お言葉ですから」と主に従って網を降ろしたペトロが2艘の舟いっぱいの大漁の恵みに与ったように、帰国者の落ち着いた教会生活のために国内と国外、両方の教会が協力し合うことが望ましい。帰国した受洗者が皆さんの教会へ来たら、ぜひ暖かく迎え入れていただきたい。